

早稲田大学大学院文学研究科日本文学専攻
課程博士学位申請論文概要書

『今昔物語集』震旦部の成立 — 『今昔物語集』と中国仏教説話集 —

三田明弘

本研究は、『今昔物語集』震旦部の文芸的特質を明らかにすることを目的とし、『真報記』や『三宝感応要略録』との比較研究を行うものである。

第一部『『今昔物語集』震旦部前史』では、仏教説話集という文学様式の中国における成立と展開を、各時代の仏教のおかれていた状況などと関連させながら分析することにより、震旦部のみならず『今昔物語集』そのものの成立の根源を論じた。

第二部『『今昔物語集』震旦部論』では、震旦部各巻の成立を、二つの側面からのアプローチによって解き明かした。

一つは、震旦部に直接的・間接的にかかわる漢籍との比較であるが、常に比較対象となる漢籍の本質の探求を出発点とし、一話同士ではなく、集レベルのスケールの比較を試みた。

もう一つは、説話配列の持つ意味の徹底的な分析である。集としてまとめられた個々の説話を一話ずつ

順番に読み進めるといふ行為がもたらす、他の読書体験とは異なる独特の感動の原因は何かという、説話集という存在に対する根本的な問いを考察する中で、本研究において「主題深化」型配列と呼んだ説話配列を、論者は『三宝藏感要略録』や『今昔物語集』震旦部などに見いだした。震旦部各巻における、「主題深化」のメカニズムを解析することによって、個々の説話が有機的に連動して、感動の源泉たる主題を形成している集合体としての説話集像を描き出すことを目指した。

この二つのアプローチの方法を融合し、『三宝藏感要略録』や『冥報記』などが構築した世界と、『今昔物語集』震旦部の作り上げた世界の共通点と差異を明らかにしていった。漢籍から自立し、震旦部が独自の主題を確立してゆく過程を描くことによって、『今昔物語集』震旦部の成立を示したのである。

本研究は、以下の三点を大きな特色とする。

一、中国の東晋より唐に至る各時代の仏教説話集の分析と研究を行い、中国仏教説話を通史として把握する、説話文学研究史上初の試みとなった。中国仏教説話の誕生期から成熟期までを『今昔物語集』との関わりのなかで描くことにより、グローバルな視点での仏教説話文学史の構築を目指した。

二、典拠側の作品を寸断して論じる、従来の比較文学の研究方法に対するアンチテーゼとして、『今昔物語集』と中国の説話集の、説話集としての全体像同士の比較研究を行った。そのために、『今昔物語集』の重要典拠として従来より重視されながら、その作品世界内部にはほとんど踏み込まれることのなかった『三宝藏感要略録』や『冥報記』の世界の本格的な解明を行った。

三、『今昔物語集』の配列法則として二話一類様式はよく知られているが、本稿では、『今昔物語集』のもう一つの配列システムとして「主題深化型」配列を提唱した。

二話一類は、和歌の掛詞のような秘められた暗合であり、作品の主題には必ずしも直結しない場合も多い。それは極めて様式的な美学であるが、それに対して「主題深化型」配列は、直接『今昔物語集』のテーマにかかわる配列様式である。映画にはオムニバス方式という、複数の短編映画を組み合わせて一つの作品としてある主題を浮かび上がらせるという手法があるが、それに少し似ている。しかし、オムニバス方式の映画がときとして一見関係のなさそうなくつかのエピソードを並べ、最後にそれらをつなげてみせるという方法を採用するのが見られるのに対して『今昔物語集』は、はっきりと主題は表面に出している。リレーでバトンが走者から走者へと受け渡されるように、前話の主題を後の説話が受け継ぎ、その主題に対する認識が深まってゆくという、説話の配列手法であり、『三宝感应要略録』にも説話配列の傾向としては見られるが、方法論として意識的に活用しているのはやはり『今昔物語集』なのである。

以下に本書各章の概要を記す。

序章 研究史と本稿の目的

「Ⅰ『今昔物語集』震旦部研究の流れ」では、江戸から平成に至る『今昔物語集』震旦部の研究史を述べるとともに、魯迅の『古小説鈎沈』にはじまる中国における仏教説話研究の状況についても論じた。そして「Ⅱ本稿の内容」において、「中国仏教説話史の試みから震旦部の成立論へ」と題して本研究の意義を

述べ、続いて本稿各章の要点を記した。

第一部『今昔物語集』震旦部前史

第一章『荀氏靈鬼志』と『搜神後記』——中国仏教説話の黎明期——

『荀氏靈鬼志』および『搜神後記』の仏教説話は、後世のものとは明らかに異質な、神仙方術的要素の濃厚な仏教説話である。その多くが、仏教説話が定型化する以前のものであり、話型の極めて不安定な未完成さが露出している。仏教を誤って伝えるものとして淘汰され、後世の仏教説話集に採用されなかった説話も多い。しかし、中国に土着化する以前の、エキゾティズムとしての仏教を鮮烈に描写しており、文学的完成度は低くない。話型に縛られない奔放さは、後世の仏教説話にはほとんど見られなくなり、これから初期仏教説話の独特の魅力とさえいえる。

『今昔物語集』震旦部は、中国仏教説話を収録する上で、話型としてソフィステイケートされたものを選んでおり、初期仏教説話の面影はもはや見られない。しかし、そのことが、震旦仏法部のトーンをやや均質的なものになっていることは否めない。

初期仏教説話の特質を一言で表すとすれば、「異国性」という言葉がふさわしいであろう。これらの説話は、仏教を、中国文化とは本質的に差異を有する異国の文化として認識することが、発想の原点になっている。

以降、仏教の中国化が進むにつれて、仏教説話を成立させる発想も内容も中国の伝統的観念と折り合いをつけたものに変化してゆき、「異国性」という要素は徐々に薄れてゆく。

第二章『光世音応驗記』——至心の祈り——

東晋貴族社会では、哲学的な思考や議論が流行し、老莊玄学への関心の延長線上で仏教がもてはやされた。ここに日本における勸学会のように、士大夫たちと仏教者の交流圏が成立し、その指導的役割を果たした僧が士通であった。『光世音応驗記』の作者謝敷の仏友、郗超が士通と深く交わったことが、『晋書』卷六十七の郗超の伝をはじめ諸書に見られるのである。

士通と交友を結んだ貴族は数多いが、郗超は『奉法要』という士大夫の視点からの仏教概要書を書くなど、仏教に対する姿勢がとりわけ真摯であった。郗超のそのような真摯さを、謝敷も共有していたはずである。そのことが、東晋という同時代の作品でありながら、『荀氏靈鬼志』、『搜神後記』と『光世音応驗記』を異質なものになっている。

『荀氏靈鬼志』、『搜神後記』において、仏教は、「異国性」を強く帯び、「外来」の文化として漢人とは距離のあるものであったが、『光世音応驗記』では、至心の祈りと観世音の救済が一体化しており、救いを求める人の心と仏教の間には一分の懸隔もない。

『今昔物語集』の中心主題として「至心」、「至誠心」が片寄正義により指摘されたが、説話集において「至心」、「至誠」を主題とした最初のもののは、『光世音応驗記』にほかならない。この中国における最初の本格的仏教説話集は、「至心」、「至誠」という主題を獲得することによって、従来の志怪小説とは異なる仏教説話集としての自立を果たした。

『光世音応驗記』は、様々な意味で、『今昔物語集』の原点といえる説話集である。

第三章『幽明録』——地獄の発見——

『幽明録』は、内容・表現ともに六朝志怪の中でも高水準のものであり、おそらくは編者劉義慶がいまだ仏教に帰依する以前の撰になるものである。神仙方術的仏教説話から完成度の高い転生譚まで、仏教に対する理解の深度が、各話まちまちなのである。時代も、劉義慶自身も、仏教へと傾斜してゆく過渡期の状況が、そのまま編纂姿勢に反映されているといえる。

そして、中国の風土と仏教的要素を融合させた中国独特の仏教説話の型を創出したところに、『幽明録』の達成がある。それを端的に示すのが、入冥譚である。死者の物語である「鬼話」は、仏教導入以前より中国志怪小説の主要ジャンルであった。その話型に仏典に描写される地獄を組み込んだものが入冥蘇生譚であるが、それによって中国の鬼も仏教の地獄も相互に変質した。そして、裁判機構を持つ官庁的地獄という新しい冥界像と、そこを舞台に繰り広げられる説話群が、新たな中国説話のパターンとして定着するに至るのであるが、その型を確立したのが『幽明録』なのである。

『今昔物語集』震旦部においても、入冥蘇生譚は世俗の巻である巻十を除く、仏法部のすべての巻に、巻九を筆頭に高い割合で見られ、入冥蘇生譚は、天竺部・本朝部に対する震旦部の独自性を主張する代表的な話型であるといえる。その意味では、『幽明録』は、『今昔物語集』震旦部を規定する話型の根元的な発祥源である。

第四章『宣驗記』——三宝靈驗譚の成立——

『宣驗記』は、仏法僧の三宝説話の類聚にその革新性があつた。『宣驗記』以前の説話集で、仏像、經典、

僧の靈驗譚を殊更に強調したものは見られない。法琳の『弁正論』『十代奉仏上篇』にも、「著宣驗記、贊述三宝」と、この書において最も特徴的なのが三宝称揚説話であることが指摘されている。もともとそれは単独の仏像靈驗譚や經典靈驗譚が『宣驗記』以前にはなかったという意味ではない。仏教称揚という明確な意図を持ち、その表現方法として三宝説話の列挙というスタイルを創出したのが、『宣驗記』であるというのである。

『光世音応驗記』のように特定の仏名を冠すものとは異なる、より包括的に仏教世界を表現し得る説話集を確立したことの意味は大きい。このスタイルは、『三宝感応要略録』を経て、『今昔物語集』の説話構成を規定するに至るのである。

劉宋は王朝自体が崇仏傾向にあったが、劉義慶は晩年、特に仏教に深く傾倒した。『宣驗記』はそのころの作であろう。

第五章『弁正論』——善報と惡報の論理——

隋唐は、中国において仏教が最も盛んであった時代であり、また、それだけに仏教と道教の確執も特にすさまじい時代であった。傳奕と法琳の論争はその代表的なものである。武徳九年（六二六）、仏教・道教ともに、洛陽・長安に仏寺・道観各三箇所、諸州に一寺一観のみを残し、他はすべて廃棄せよという勅命が下り、論争の結末は仏教・道教どちらにとっても不利なこととなった。しかし、この勅命の四カ月後に玄武門の変が勃発し、実施は沙汰やみとなった。

傳奕の論難に対する法琳の反論書である『弁正論』は、説話集ではないが、説話を大いに活用しており、

善報と惡報の説話を並記すると、そこに修善を勧めるというテーマが浮かび上がるという説話配列の方法論を築いた初めての作品である。説話配列による主題の主張は、コロンブスの卵のようなもので、いったん方法が完成されると、次々とこの手法による「配列がテーマを語る」説話集が生み出されるに至った。我が国の『日本国善惡現報靈異記』における善惡の報いを対比させる発想も、広い意味では、『弁正論』の影響下にあるといつてよいであろう。そして、『今昔物語集』に至っては、数個の説話が一つのグループとなり、一話ずつの微妙なモチーフの差異の連続が、一つの主題を浮き彫りにする「主題深化型配列」（第二部に詳述）という説話配列を採用している。説話配列に主題を語らせる方法を、芸術的なまでに精緻に組み上げたものといえる。

第六章『冥報記』——「釈氏輔教の書」から文学へ——

魏晉南北朝の仏教説話集の編者は、二種類に分けることができる。その一は、『幽明録』、『宣驗記』の編者劉義慶のように、卓越したプロデュース能力を発揮し、諸書の旧文を蒐集して説話集を編集するタイプであり、もう一つは、『光世音応驗記』の編者謝敷のように、自らの信仰の表出として、身近の実見実聞を書き記すタイプである。

魯迅は『中国小説史略』において仏教説話集を「釈氏輔教の書」と呼び、一般の志怪小説よりもその文学性を低く評価したが、そのとき魯迅の視野に入っていたのは劉義慶『宣驗記』、王琰『冥祥記』、顔之推『集靈記』・『冤魂志』、侯白『旌異記』などの旧文編集型の仏教説話集であった。魯迅が『光世音応驗記』のような、編者の真摯な祈りの表現ともいえる作品に出会っていれば、仏教説話集が単なる宣教の具では

なく、作者の自己表現を動機とする文学たり得てゐることを知り得たのではないかと思われるが、『冥報記』はまさにそのような作品である。

『冥報記』が実見実聞にこだわりの、話者を明記するのは、単に説話の信憑性を高めるためだけではない。自らの周囲の人々の話を集め記すことが、自らの生きてきた時代の記憶の表現となつてゐるのである。冒頭話の信行は、祖父高類にゆかりの人物であり、祖父の建てた真寂寺は、唐臨の仏教の原点であつた。『冥報記』に話者の一人としてしばしばその名が見える友人岑文本は、唐臨とともに太宗の高麗親征軍に従軍し、幽州に客死してゐる。現世と冥界を繋ぐ『冥報記』の説話群は、唐臨にとっては、自己を記憶の中の身内や友人と繋ぐ回路なのである。

そのような唐臨の死者たちへの親密感が、『冥報記』の冥界描写に、独特のなま暖かさを付与してゐる。それが、聞き書きのもつ生々しさという方法論や、唐代という文学表現の転換期という時代条件だけでは説明できない『冥報記』の描写の特徴である。

そして、各話が唐臨の自己表現になつてゐるだけではない。構成の説明で論じたように、三巻本全体の構成・配列もまた唐臨の世界認識の縮図となつてゐるのである。

『光世音応驗記』の実見実聞へのこだわり、『幽明録』の創造した冥界、『宣驗記』の仏教説話集の方法、『弁正論』の説話配列による主題表現を受け継ぎ、仏教説話集を、近代的な意味でも文学と呼びうる芸術的な高みにまで洗練させたのが、『冥報記』なのである。

『冥報記』の芸術性の高さが、豊かな表現力を有してゐた『今昔物語集』編者をして震旦部の主要典拠として選択せしめたのであらう。

第二部『今昔物語集』震旦部論

第一章 偽史から物語へ〔巻六の論（その一）〕 『今昔物語集』と『法苑珠林』

『今昔物語集』の説話には、中国説話の影響がある」というのは、実はそれはとても不正確な言い方である。日本の説話に時代や作品ごとの明確な差異が認められるのと同様に、中国の説話も、魏晉・六朝・隋唐の説話はそれぞれ独特の内容と表現を有している。中国説話の『今昔物語集』への影響を論じるとすれば、中国のどの時代の説話が『今昔物語集』に影を落としているかということまで論じる必要がある。この章では、唐という時代が、仏教説話の変貌著しい時代であり、『今昔物語集』がその影響下にあることを論じた。

隋唐期は、中国史上、最も仏教の盛んであった時代であり、それ故に政治と仏教が複雑に絡み合った時代でもあった。その中で断片的な仏教説話の数々が仏教史の部分として統合され、その過程で変質していった。そして、事実とは異なる「仏教伝来史」が仏家の定説として形成されていった。これは極めて唐代的な現象であり、かつ政治的な現象であった。しかし、『今昔物語集』に享受されたとき、それらの説話は政治的意図を離れ、「物語」として変貌を遂げた。

そこには、単なる唐代的説話の受容に終わらない『今昔物語集』の達成がある。そして、同一素材の異なる展開相を示すものとして『法苑珠林』と『今昔物語集』は、出典論としてではなく、仏教説話文化論の位相で、相互に比較研究の対象となるのである。

第二章 祈りと慈悲〔巻六の論（その二）〕 仏宝話群と『三宝感応要略録』

本章と次章では、『三宝感応要略録』から『今昔物語集』への、作品構造上の転換の解明に正面から取り組んだ。

『三宝感応要略録』と『今昔物語集』の問題は、研究史上、これまであまり深く掘り下げられることがなかった。しかし、『今昔物語集』の二話一類様式の説話配列法が『三宝感応要略録』の影響によるものであるという国東文麿の重大な指摘もあり、『三宝感応要略録』と『今昔物語集』の配列構造の共通点と相違点の解明は、『今昔物語集』の作品構造を理解する上で看過できないものである。

『今昔物語集』巻六から巻七にかけての仏宝譚・法宝譚を、それに対応する『三宝感応要略録』の部分と比較すると、二話一類様式という表面的な様式以上の、共通点が見いだされる。

それは、連続する数話の説話が、モチーフを共有することによって、相互補完的に一つの大きな主題を形成するという手法が採られていることである。

しかも、『三宝感応要略録』よりも『今昔物語集』に特に顕著に見られることであるが、前後に配列された説話は、前話の主題を後話が引き継ぎ、さらにその主題を掘り下げるといふ、前後の説話の有機的な連動が認められるのである。それが、本研究において「主題深化型配列」と呼ぶ説話の配列方法である。

『今昔物語集』の各説話は、スタンブブックに整理された切手や、標本箱に配置された鉱石のように、分類された状態でそれぞれが各個に光を放つという態のものではなく、人体の器官を構成する細胞群のように相互の有機的な関係の中で主題に向かって運動しているのである。

それでは、『今昔物語集』巻六法宝話群の主題展開とは、具体的にはどのようなものなのか。

論中で検証したように、各話の主題の連動が描き出したのは、人の真摯な祈りと仏の慈悲の誓いの向かい合う、仏教文学の感動の最も原初的かつ根源的な構図であつた。

『今昔物語集』は、基本的には『三宝感応要略録』の忠実な翻訳を心がけているので、一話だけを取り出して比較すると、『今昔物語集』と『三宝感応要略録』の懸隔はさほど大きくはない。しかし、説話の配列順序の変更などによって、各話の微妙な差が話群の主題を大きく変えていく。

説話の配列技術が、『今昔物語集』をして『三宝感応要略録』から飛躍した独自の文学たらしめているのである。

第三章 仏のいる世界〔巻七の論（その一）〕 般若経話群と『三宝感応要略録』

本章および次章で扱う『今昔物語集』巻第七は天台五時教判のうち、般若時・法華涅槃時の經典に関する説話を中心に構成されている。展開がオーソドックスな經典靈驗譚が続き、単調な印象を読者に与えるためか、従来論じられることの非常に少なかった巻である。

同一モチーフの反復というのは、この巻七に限らず、仏教説話集にはかなり普遍的に見られる現象である。繰り返される物語群を相互に関連づけることなくそれぞれ独立したものとしてみれば、それらは文字どおり、反復でしかない。しかし、説話群を一つの大きな物語としてみれば、反復はモチーフを強調し、各説話間の微妙な差異が明確に認識される。「主題深化型配列」は、反復されるモチーフを最も効果的に利用した説話配列であるといえる。

天竺と漢土の説話を混在させる配列様式の『三宝感応要略録』では、配列された説話群がそのままイン

ドから中国へかけての大陸地図となり、般若經の普遍性を具象化して見せた。『三宝感応要略録』の説話配列は、パノラマ的な効果を多分に持っている。そして、天竺と漢土の説話の混在は、『三宝感応要略録』が常に仏教を異国のものとして意識していたことの表れとも取れる。

一方、『今昔物語集』は、仏という『今昔物語集』全体の根源へ向けて、抽象的に主題を深化させてゆく点が、『三宝感応要略録』に対する際だった配列上の特色である。そして、般若經話群においては、釈迦仏へと向かう意志が、天よりも人界を尊ぶ現世志向となつてゐる点が注目される。仏教性が厭世観ではなく現世、そして人間の肯定へと向かう主題構造が、『今昔物語集』という作品の印象を陽性のものにしてゐるのである。

第四章 自利から利他へ〔巻七の論（その二）〕 法華經話群の構成

『今昔物語集』法華經話群は、僧尼を主人公とする前半は主に『三宝感応要略録』に、俗人を主人公とする後半は主に『冥報記』によつてゐる。法華經話群より前に配置されている仏宝話群や般若經話群は、主に『三宝感応要略録』による三宝靈驗譚で構成されている。法華經話群より後ろに置かれてゐる孝養話群は、主に『冥報記』の入冥蘇生譚によつて構成されている。法華經話群は震旦仏法部全体の間中に位置し、この話群を境に震旦仏法部は『三宝感応要略録』的な前半部と、『冥報記』的な後半部に分かれるのである。法華經話群では、自利性から利他性へという極めて大乘的な主題深化を展開させてゐる。

前半の僧尼の話群が地獄に堕ちた他者を救う菩薩行まで主題深化を突き詰め、後半の在家者話群に至る。主題を仏の間近まで高めると、再び現世肯定的な地点まで戻つてくるのが、仏法話群などにも見られた主

題の描く軌跡である。

在家者話群で再び主題が自利から利他という方向へ展開されるが、編者の本来構想していた話数よりも早く、悪趣に堕ちた者の救済という菩薩行の高みに主題が至ってしまったのである。その結果、「僧尼の説話」と「在家者の説話」の区別は主題の上で無意味になり、32話には純粹利他行の僧の話が配置されたのである。

「僧尼の説話」と「在家者の説話」のそれぞれの主題深化は、極めて高次の段階で一致を見た。この時点で、法華経話群は、それ以上の主題の展開が不可能となったものと思われる。33話から40話が欠話となっているのは、法華経説話の主題構想が完結してしまったことに起因すると考えられる。

主題深化配列が、話群の空白を作った。挿入すべき素材としての説話が編者のもとに無かったという物理的な問題ではなく、菩薩行へと主題が極まったことのもたらす形而上的な必然であったのである。

第五章 応報から救済へ〔巻九の論〕 『今昔物語集』と『冥報記』

『三宝藏感応要略録』とともに『今昔物語集』震旦部の主要典拠の双璧をなす『冥報記』の説話を最も多く取り込んでいる巻は、巻九「震旦付孝養」である。巻九が冥界説話を多く取り込んだのは、「孝養」という觀念を死者の供養を含むものとして、儒教的な孝養譚のほかに、仏教的な六道輪廻觀に基づく冥道的孝養譚を必要としたからである。

『冥報記』においては、説話の配列が表現するものは、唐臨の世界觀の縮図である。上品の人は少なく、下品にして惡報を受ける者は多い。唐臨自身は温情家であったようであるが、司法官としての經歷の長さ

故か、因果応報の理に支配された世界を冷静に見つめて表現する厳しい客観性を『冥報記』は持っている。一方、『今昔物語集』は、話末評語の付加に象徴されるように、説話内で生じている事態に常に積極的にコミットしてゆく。事実を淡々と受け入れて完結するということがない。そのような能動的な意志が、『今昔物語集』の特性であり、説話に自らの意志を介入させる方法が、「主題深化型説話配列」なのである。『冥報記』の因果応報譚を、救済の物語へと変貌させたのも、まさにそのような意志と技術であったといえよう。

第六章 秦と漢——君臣の論理——〔卷十の論（その一）〕 『今昔物語集』と『史記』

本章と次章では、中世的漢学教養が卷十の形成に大きく関与していることを述べつつ、卷十における「主題深化」を分析した。

本章では、『今昔物語集』の描く秦三代の国王像が、『史記』に引かれる賈誼「過秦論」の三主評を根底に据えながら、個々のエピソードや表現はむしろ『史記』との齟齬が目立つことを論じた。このような齟齬が生じた背景には、平安期の学問としての『史記』の受容が想定される。『今昔物語集』は直接には『史記』に拠っていない。しかし、賈誼「過秦論」を秦に対する基本的な評価とする儒学的教養圏の周辺にいたと考えられる。卷十冒頭話群は、儒家的歴史観を基礎に、『史記』そのものではなく、漢籍注釈学的環境から創出されたと考えるのが妥当であろう。

従来、卷十冒頭話群は、「国王譚」と捉えられてきたが、国王と臣下の関係に重点を置くこれらの説話は、「君臣譚」として把握する方が良いように思われる。そして、仏法部において「仏」や「救済」という形

而上学的主題が展開されたように、世俗の巻である巻十では、「帝徳」という抽象的命題が「主題深化」の手法によって追求されるのである。

第七章 中世日本の中国史観〔巻十の論（その二）〕

『今昔物語集』と『貞観政要』

前章に論じた『史記』や賈誼「過秦論」への視点だけでは十分に冒頭話群を解き明かすことはできない。君臣の本来あるべき姿、真の帝王の資質というこの話群の主題の根源を探らなくてはならないのである。それ故、本章において、引き続きこの冒頭話群を論じ、『貞観政要』的帝王観が、その根底に認められることを説いた。

これまで具体的に論じられることは少なかったが、『今昔物語集』、特に巻十を理解する上で、漢学の影響が重要であることは、従来しばしば指摘されてきた。本章は、この問題に正面から取り組み、中古・中世に必須の教養として受容されていた『貞観政要』の帝王観を通してみることによって、巻十冒頭話群の主題を読み解くことができることを示したものである。

以上